



コーパスから見えてくる「ていく・てくる」：学習者と母語話者の比較

蘇，鷹

(Citation)

Learner Corpus Studies in Asia and the World, 6:133-146

(Issue Date)

2024-03-20

(Resource Type)

departmental bulletin paper

(Version)

Version of Record

(JaLCD0I)

<https://doi.org/10.24546/0100487719>

(URL)

<https://hdl.handle.net/20.500.14094/0100487719>



コーパスから見えてくる「ていく・てくる」

—学習者と母語話者の比較—

蘇 鷹(上海大学)

Teiku and Tekuru Seen in Corpora

—A Comparison of L2 Learners and Native Speakers—

SU Ying (Shanghai University)

概要

本稿は I-JAS の学習者データと JASWRIC の母語話者データをもとに、学習者(中国人と韓国人)と母語話者の「ていく・てくる」の使用実態を考察した。「ていく・てくる」のデータを把握した上、前接動詞を中心に学習者と母語話者の使用上の異同を分析した。「母語話者も学習者も使用した動詞」から母語話者も学習者も主に空間移動を表す「てくる」で、学習者が母語話者と似ている使用傾向が見られる。また、「母語話者は使用したが、学習者は使用していない動詞」から母語話者の「ていく」の時間用法があったが、学習者が時間用法を回避している傾向が見られる。

キーワード

前接動詞, 補助動詞, 空間用法, 時間用法

1. はじめに

日本語における「行く・来る」と「ていく・てくる」は、中国語と韓国語で似たような表現があります。下記の例(1)は本動詞としての「行く・去・가다」「来る・来・오다」で、例(2)は補助動詞としての「ていく・去・가다」「てくる・来・오다」である。

(1) (日本語)これから学校へ行く。

(中国語)现在去学校。

(韓国語)지금 학교에 가겠습니다(가다)。

(日本語)友達が上海に来た。

(中国語)朋友来了上海。

(韓国語)친구가 상해에 왔습니다(오다)。

(2) (日本語)学校まで走っていこう。

(中国語)跑去学校吧。

(韓国語)학교까지 뛰어갈시다(뛰다 + 가다)。

(日本語)借りてきた。

(中国語)借来了。

(韓国語)빌려왔습니다(빌리다 + 오다)。

日本語も中国語も韓国語も似たような表現があるにもかかわらず、学習者間及び学習者と母語話者の間の使用差異が一目瞭然であることはとても興味深いと考え、本研究では学習者コーパスや母語話者コーパスのデータに基づき、その差異を分析していくことにする。

2. 先行研究

今までの記述研究では、「ていく・てくる」の用法は移動、時間、発生、変化などをあげられ(森田, 1994)、それを主に空間用法から時間用法まで拡張していくように解説している。例えば、中心的用法としての空間移動から非中心的用法としての時間・認知の移動までの拡張(浜田, 1989);移動を表す機能からアスペクトを表す機能までの拡張(今仁, 1990);空間移動から時間的移動へ、それから心理的移動までの拡張(益岡, 1992);プロトタイプ用法としての空間的移動から、拡張用法とし

ての時間的アスペクト用法、認知的用法までの拡張(陳湘奉, 2017)などが挙げられる。本稿で言う時間用法は時間アスペクトや認知の移動、心理的移動などを含め、空間用法と区別して使わせる。

対照研究では、空間用法は言語間の対応が見られるのに対して、時間用法はほとんど対応していないという指摘がしばしば見られた。日本語原文と中国語訳文の対照研究により、両言語は完全に一致していないという指摘もあり(陳湘奉, 2017)、また、中国語原文と日本語訳文の対照研究によりも、空間移動を表す「てくる・ていく」以外に、他の用法が日中完全対応の場合がないという指摘もある(廖韻, 2023)。一方、日本語と韓国語の対照研究により、空間的移動を表す場合は両言語における相違点が見られないが、時間の流れに伴うものごとの始まりや新たな状態への変化などを表すアスペクトを表す部分において、両言語に相違点が見られる(都基禎, 2008)。

第二言語習得研究では、菅谷(2002)は KY コーパスにおける英語・韓国語・中国語学習者(合計 90 人)を対象として研究した結果、補助動詞「ていく・てくる」では「てくる」のほうが使用されやすい。補助動詞の「ていく・てくる」において、プロトタイプの物理的空間移動から非プロトタイプである時間用法(認知的用法、時間的用法)へと使用が広がっていく傾向が見られた。

そのほか、母語習得研究においても空間から時間までの習得順序が見られた。「なに」「どこ」「だれ」「なぜ」「どう」「いつ」の 6 つの疑問詞について、多様な言語(英語、ドイツ語、韓国語、日本語など)で幼児の発話を記録した研究から、幼児は、まず「なに」あるいは「どこ」と発話しはじめ、最後に「いつ」という質問をするようになるとしています。日本人の幼児の疑問詞の出現順序を研究した大久保(1967)も、「なに」「どこ」が初めに発話され、最後に「いつ」という時間についての問いが発話されるようになる」と報告しています(Bloom, Merkin & Wootten, 1982; Wode, 1971; Clancy, 1989; 大久保, 1967)。

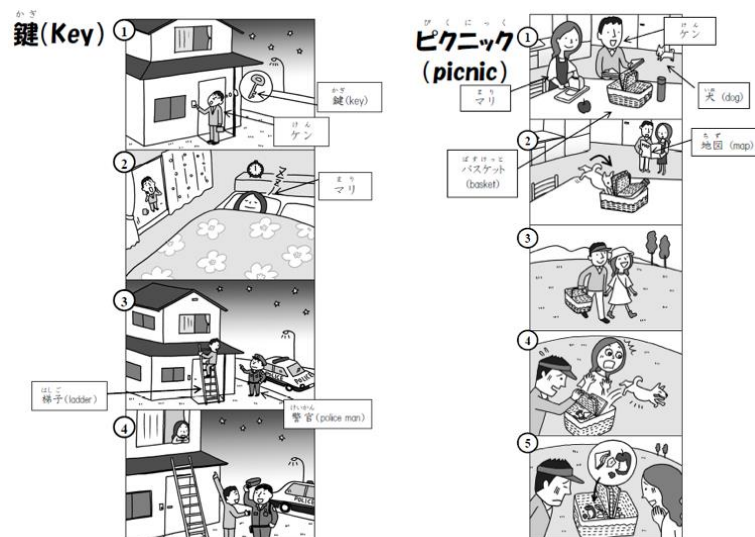
日本語学習者のデータからも空間から時間への習得順序が見られるか? という疑問を持ち、同じ課題を実施された母語話者と学習者のデータから「ていく・てくる」の前接動詞を分析しながら学習者間、また学習者と母語話者との使用差異を考察していく。

3. データ

本論文では日本語学習者と日本語母語話者のデータを比較しながら、使用上の特徴を分析するため、それぞれ I-JAS の学習者データと JASWRIC の母語話者データを用いる。両コーパスにおける「キー」と「ピクニック」をテーマとするストーリーライティング(SW)のデータを取り出して、分析していく。また「キー」と「ピクニック」を場面別でそれぞれ K1～K4、P1～P5 と名付ける。

図 1

ストーリーライティングに使用されている漫画



本稿では I-JAS における中国人日本語学習者 200 人と韓国人日本語学習者 100 人、JASWRIC における日本語母語話者 700 人を対象とする。詳しい情報は以下のである。

表 1

中国人日本語学習者 200 人

J-CAT点数	-149	150-199	200-249	250-299	300-349	350-	合計
レベル	1	2	3	4	5	6	
人数	2	30	75	77	15	1	200

表 2

韓国人日本語学習者 100 人

J-CAT点数	-149	150-199	200-249	250-299	300-349	350-	合計
レベル	1	2	3	4	5	6	
人数	6	8	26	38	20	2	100

表 3

日本語母語話者 700 人

学年	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12	13	合計
人数	37	43	35	27	58	62	22	112	45	90	86	30	53	700

I-JAS における中国人日本語学習者 200 人の 400 篇作文は合計 41419 語で、韓国人日本語学習者 100 人の 200 篇作文は合計 20550 語である。また、JASWRIC における日本語母語話者 700 人の 1400 篇作文は合計 121966 語である。その三グループの「ていく・てくる」の使用数及び PMW(Per Million Words)は以下のようなものである。

表 4

使用数と PMW

	日本人 700 人		中国人 200 人		韓国人 100 人	
	使用数	PMW	使用数	PMW	使用数	PMW
ていく	130	1033	21	507	2	97
てくる	879	7207	110	2656	87	4234

表 4 から、学習者間及び学習者と母語話者との使用差異がはっきり見える。母語話者は学習者より「ていく・てくる」の使用数も PMW も高いことが分かる。PMW について、韓国人の「ていく」が

一番少なくて、中国人の「てくる」が一番少ないことが分かる。また学習者の日本語能力レベル別 PMW を母語話者の学年別 PMW と比較してみると、「ていく」について、韓国人学習者のデータが非常に少ないので、何とも言えないが、中国人学習者はレベルが上がるに従って使用されるようになる傾向が見られる。「てくる」について、学習者が徐々に上がっているが、J-CAT 成績が一番高い 350 点以上の学習者であっても母語話者の一番低い PMW よりも低い。学習者の上達傾向と対応して、母語話者は一年生の時から既に高い PMW で維持していることが分かる。

表 5

学習者レベル別 PMW

J-CAT 点数		-149	150-199	200-249	250-299	300-349	350-
中国人	ていく	0	518	417	518	874	0
	てくる	0	1899	2083	3108	4078	6289
韓国人	ていく	1299	0	0	116	0	0
	てくる	1299	1546	4162	4172	5642	5263

表 6

母語話者学年別 PMW

	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12	13
ていく	1618	1007	479	1173	1258	779	454	1714	871	1340	672	1025	698
てくる	8786	6645	6703	7236	6485	7889	7488	6800	8091	6588	7881	6831	7275

上述のデータ上の差異を踏まえて、これから前接動詞から「ていく・てくる」の使用を分析する。

4. 分析

「ていく・てくる」の前接動詞を「母語話者も学習者も使用した動詞」と「母語話者が使用したが学習者が使用していない動詞」に分けて分析していく。「母語話者も学習者も使用した動詞」について、「ていく」は一語もなく、「てくる」は「出る、飛び出す、飛び出る、持つ、帰る、入る」の6語が挙げられる。また「母語話者が使用したが学習者が使用していない動詞」について、「ていく」は16語で、「てくる」は30語である。詳しくは下記のようなものである。

「ていく」16語：

帰る、入る、去る、登る、飛び出す、入れる、進む、付く、詰める、立ち去る、入り込む、上がる、使う、忘れる、運ばれる、置く；

「てくる」30語：

取る、出す、聞こえる、飛び込む、置く、かける、呼ぶ、近づく、買う、駆けつける、取り出す、向かう、尋ねる、ぱくる、乗る、奪う、話しかける、見る、詰め寄る、鳴らす、侵入する、飛びつく、突きつける、向ける、巡回する、言う、応答する、語りかける、伝わる、注意する。

本稿では「母語話者も学習者も使用した動詞」に関して「てくる」の6語、「母語話者が使用したが学習者が使用していない動詞」に関して「ていく」の16語を取り出して分析する。

4.1. 「てくる」の前接動詞：母語話者も学習者も使用

「母語話者も学習者も使用した動詞」の中、「ていく」の前接動詞は6語あって、その中の「出る、飛び出す、飛び出る」は全部「ピクニック」の4コマ目の犬がバスケットの中から出てくる場面で使われている。母語話者も学習者も使用されているが、詳細が違う。

表 7

母語話者も学習者も使用した動詞:「出る、飛び出す、飛び出る」

	母語話者	中国人学習者	韓国人学習者
出る	犬が出てくる	<u>犬が出る</u> 犬が出てくる	<u>犬が出る</u> 犬が出てくる
飛び出る	犬が飛び出てくる	<u>犬が飛び出る</u> 犬が飛び出てくる	<u>犬が飛び出る</u> 犬が飛び出てくる
飛び出す	犬が飛び出す 犬が飛び出してくる	犬が飛び出す 犬が飛び出してくる	犬が飛び出す 犬が飛び出してくる

中国人学習者と韓国人学習者の使用例で、母語話者の使用されてないものがあった。それは例(3)(4)のような「犬が出る」と例(5)(6)のような「犬が飛び出る」である。

(3)でも、二人はバスケットを開いたら、犬が出ました。(CCH27)

(4)バスケットから犬が出ました。(KKD15)

(5)二人は目的地に着いて、バスケットを開くと、うちの犬が飛び出ました。(CCS03)

(6)中から犬が飛び出たからです。(KKD33)

学習者は三つの動詞の「る」形と「V てくる」形の両方が使われていることから、学習者にとって「V てくる」の用法が難しくて、混用があったのだと考えられる。

また、「持つ、帰る」について母語話者も学習者も同じ場面で同じような用法が見られるが、「入る」について相違が見られた。韓国人学習者は「バスケットに入ってくる」でなくて、「バスケットに入る」しか使われていない。中国人学習者も韓国人学習者も「家に入ってくる」がなくて、「家に入る」しか使われていない。

表 8

母語話者も学習者も使用した動詞:「持つ、帰る、入る」

	母語話者	中国人学習者	韓国人学習者
持つ	梯子を持つ 梯子を持ってくる バスケットを持つ バスケットを持ってくる	梯子を持つ 梯子を持ってくる バスケットを持つ バスケットを持ってくる	梯子を持つ 梯子を持ってくる バスケットを持つ バスケットを持ってくる
帰る	ケンは帰る ケンは帰ってくる 帰ったケン 帰ってきたケン	ケンは帰る ケンは帰ってくる 帰るケン 帰ってきたケン	ケンは帰る ケンは帰ってくる 帰るケン 帰ってきたケン
入る	バスケットに入る バスケットに入ってくる 家に入る 家に入ってくる	バスケットに入る バスケットに入ってくる 家に入る ~~~~~	バスケットに入る ~~~~~ 家に入る ~~~~~ 通報が入ってきた

「持つ」「帰る」は母語話者も学習者も同じ使用傾向であるのに、なぜ「入る」は違うのか？それは学習者の母語と関係があると考え、別の論文で議論することにする。

「母語話者も学習者も使用した動詞」による「V てくる」構造で、空間移動を表すものがほとんどである。それは学習者にとって空間移動用法は割と簡単で、学習者は母語話者と近い使用傾向が見られたのである。またその詳細を考察すると、学習者における「V」と「V てくる」の混用が見られ、学習者にとって難しい文法項目であることが分かる。

4.2. 「ていく」の前接動詞:母語話者使用・学習者未使用

それらの動詞 16 語で複合動詞が「飛び出す、立ち去る、入り込む」3 語あることは、学習者にとって「複合動詞+ていく」が難しいのではないかと考え、母語話者と学習者の使用された「複合動詞+ていく」を調べた結果(動詞の後ろの数字は使用回数を表す):

母語話者:出かける 9、飛び出す 2、立ち去る 1、入り込む 1

学習者:出かける 1、飛び込む 1

母語話者の使用数からも動詞の種類からも学習者より多いことは分かる。また学習者の 2 例は全部中国人学習者で、韓国人学習者は一例も見つからなかった。

また、16 語の中、母語話者が 1～2 回しか使われていない動詞を除いて、2 回以上使われている動詞「帰る 19、入る 8、去る 4、登る 3」を中心に、使う場面ごとに分析していく。

表 9

場面別 2 回以上使われている動詞:「帰る、入る、去る、登る」

	帰る	入る	去る	登る
場面別	17K4 ¹ ,2P5	7P2,1K4	4K4	3K3
多数場面	K4	P2	K4	K3

これから多数場面ごとに母語話者と学習者の使用差異を見ていく。

K4 場面では「帰る」も「去る」も警察官が離れることを表している。母語話者の使用例は以下のようである:

(7)警察官にお礼を言って警察は帰っていきました。(G10_050)

(8)マリが起きて、ケンと家族だと伝えたと警官は納得して、去っていきました。(G09_043)

同じ場面で、中国人学習者と韓国人学習者は以下のようにになっている:

(9)警官にこちらは私の家で、いろいろな説明してから警官は理解して帰りました。(KKD06)

(10)警官がここはケンの家ということ分かった後、また車で去りました。(CCS46)

P2 の子犬がこっそりカゴに入る場面では、母語話者は「入る」を以下のように使われている：

(11)2 人が地図を見ているときにこっそりと犬がバスケットに入っていました。(G05_046)

それに対して、学習者は同じ場面で以下のようにになっている：

(12)地図を研究している間 K は、家の犬がバスケットの中に入ってしまった。(CCH06)

(13)そのうちにある犬がバスケットに入ってしまった。(KKD02)

K3 の場面では、母語話者は「のぼる」を以下のように使われている：

(14)そばにあったはしごで 2 階の窓までのぼっていきました。(G09_014)

それに対して、学習者は同じ場面で以下のようにになっている：

(15)仕方がなくて、ケンはずり棒を運んで、部屋の二階に登りました。(CCH27)

(16)そして、ケンはずり棒を持って、それに登りました。(KKD43)

母語話者の使用例「警察は帰っていきま

した」／「車で去りました」／「犬がバスケットに入っていきま

した」／「2 階の窓までのぼっていきま

した」では、「V ていく」構造で、動作ではなく、事態の完結ないし心理的時間の完結を表している。言い換えれば、それは空間用法でなく、動作の完結を表している時間用法だと言える。一方、学習者は同じ動詞を同じ場面で使っても「ていく」をつけて使用することができなくて、「警察は帰りました／去っていきま

した」／「犬がバスケット(の中)に入っていきま

した」「部屋の二階に登りました」などのように動作だけに注目して、事態の完結を表すとは言い難い。

5. 結論及び今後の課題

本稿は「ていく・てくる」の前接動詞を中心に母語話者と学習者の使用上の異同を考察した。「母語話者も学習者も使用した動詞」から母語話者も学習者も主に空間移動を表す「てくる」で、学習者が母語話者と似ている使用傾向が見られる。また、「母語話者は使用したが、学習者は使用していない動詞」から母語話者の「ていく」の時間用法があったが、学習者が時間用法を回避している傾向が見られる。そう考えると、中国人学習者と韓国人学習者は「ていく・てくる」の空間用法から時間用法への習得順序が予測のではないかと考える。

今回は日本語の「ていく・てくる」と似ている表現がある中国語と韓国語を母語とする日本語学習者に限定したが、これから英語圏の学習者も視野に入れて、対照的に比較する方がもっと面白い結果が見えてくるかを期待する。

参考文献

Bloom, L., Merkin, S., & Wootten, J. (1982). “Wh”-questions: Linguistic factors that contribute to the sequence of acquisition. *Child Development*, 53, 1084–1092.

陳湘奉 (2017). 『ていく・てくる』と“去・来”の日中対照研究『さいたま言語研究』1, 59–72.

Clancy, P. M. (1989). Form and function in the acquisition of Korean wh-questions. *Journal of Child Language*, 16(2), 323–347.

大久保隆三 (1967). 『商社マンのコレボン辞典(改訂版)』東京:同文館出版.

都基禎 (2008). 「日・韓両言語における『ていく』・『てくる』と『가다/-ka-ta』・『오다/-o-ta』の対照研究」『佛教大學大學院紀要』36, 47–62.

浜田真理子 (1989). 「『行く／来る』と『ていく／てくる』の意味のつながり」. 『Sophia Linguistica』27, 45–56.

今仁生美 (1990). 「V てくる と V ていくについて」『日本語学』9(5), 54–66.

廖韻 (2023). 「文学作品の原文や訳文に基づく『てくる・ていく』と『来・去』の対照研究—魯迅の作品を例に一」『日本言語文化研究』8, 52–64.

益岡隆志・田窪行則 (1992). 『基礎日本語文法—改訂版—』東京:くろしお出版.

森田良行 (1994). 『動詞の意味論的文法研究』東京:明治書院.

菅谷奈津恵 (2002). 「日本語学習者によるイク・クル、テイク・テクルの習得研究—プロトタイプ理論の観点から」『言語文化と日本語教育』23, 66–79.

Wode, H. (1971). Some stages in the acquisition of questions by monolingual children. *Word*, 27, 261–310.

